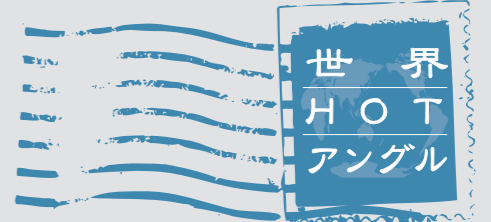


from Zambia



農村への情報伝達は手巻き式ラジオで!

日本でも最近、防災グッズとして目にする、乾電池や家庭用電気が要らない手巻き・ソーラーバッテリー駆動式ラジオ。これが今、アフリカ・ザンビアの農村で活躍している。村人たちは一体どんな番組を聞いているのだろうか? そしてラジオの持つ可能性とは?



ザンビアの典型的な農村風景。中央統計局の2003年の調査によると、農村で電気へのアクセスがある家庭は全世界の3%程度しかない(都市部は50%程度)

低い農村電化率とラジオの重要性

電化率が低いザンビアの農村では、ラジオは住民にとって貴重な情報源だ。JICAの支援で行われた調査でも、各地の村で農業指導に当たる農業普及員や農民が最も頼りにしている情報源はラジオであることが確認されている。しかし、個人でラジオを所有している世帯は多くはない。所有率の高い村でも60%程度、低い村では20~30%にすぎない。しかも、電化率が極めて低く、一般的なラジオを聞くには乾電池

人間の安全保障に貢献するラジオ

ラジオ情報を農業生産技術や生活水準の向上につなげるためには、番組の内容が農民にとって意味のあるものでなければならぬ。この事業では、人々のニーズに合った番組を制作できるように、農民からフィードバックを得る活動も支援している。電話やインターネット網が隔々々で行き届いた日本と違い、ザンビアの農村は情報インフラが未整備。そこで、現地語でアンケートを作成し、番組を聞いた後、グループにコメントや質問を書き込んでもらい、それを反映させるという試みた。

私たちと同様、ザンビアの農民にとっても情報へのアクセスは、日常生活に欠



木陰でラジオを聞く女性農民グループ。村では農民がグループをつくって野菜の共同栽培やグループ貯蓄などの活動を行っており、ラジオを配布することでグループ活動の活性化も狙っている

が必要だが、村で売っている店は少ない上、高価なため、入手するのは容易ではない。そのため、村人たちはラジオを持つ親類や近所の家に集まって番組を聞くことも多いようである。日本でも、テレビが各家庭に普及していなかった戦後間もないころは、テレビのあるところに集まって人気番組を見ていた時代があったが、ザンビアの農村ももちろんそんな感じのようだった。ところで、ザンビアの農業・協同組合省では、ラジオを農民への情報伝達手段の一つに位置づけ、作物の栽培技術や各地の農業関連事業を題材にしたラジオ番組を、英語と7つの現地語で制作し、国営放送局から放送するサービスを長年行っている。また、最近では「コミュニティ・ラジオ局」と呼ばれる小規模なFM局も各地に設置されていて、貴重な農業関連情報源となっている。



自家発電式ラジオを手にする農民。JICAの事業で配布されている手巻き式ラジオは、英国系NPOが開発途上国農村部の劣悪な環境下での使用を想定して開発したものだ

かせない。特に、同国は1990年代初頭に社会主義政策から自由主義経済に移行したが、政府が多くのサービスを無償で提供していた昔と異なり、一人一人の自発的な努力が前提となる社会では、情報の役割がますます重要になっている。情報の洪水の中で暮らす私たちに想像もつかないほど、ラジオの情報はザンビアの人々にとって貴重である。インターネットなど先進的な情報技術がアフリカの農村に行き渡るにはまだまだ長い年月を要すると予想されることから、ラジオのようなシンプルな



村人がラジオ番組を聞いて建設したという改良型のヤギ飼育小屋。ラジオは、住民が何か新しいことを始めるきっかけを提供することから、自発的な生活改善を促進する可能性も持っている

技術が開発に果たすポテンシャルは大きい。日本が支援するラジオの配布事業が、人間の安全保障に結び付く農村開発のモデルアプローチの一つになることが期待される。

1. ザンビアでは、70を超す部族語があるとされ、そのうち最も代表的な7つが公共放送用言語として採用されている。農村の人々は一般的に英語より現地語の番組を聞いている。
2. 農業情報伝達改善のための自家発電式ラジオを配布し、農業技術情報や保健衛生・栄養改善などの情報を伝達し、生活改善を図るのが目的。農業・協同組合省内に設置されている「全国農業情報サービス」という機関が実施主体で、JICAはアドバイザー専門家の派遣や機材供与などの支援を行っている。